

大東文化大学 東洋研究所所報

2012.12 No.58

目次

恩師 影山誠一教授を偲ぶ…………… 福田 俊昭 …… 1	
公開講座「アジアの民族と文化」	
第1回講座概要 …………… 鈴木 珠里 …… 3	
第2回講座概要 …………… 岡本 佳子 …… 4	
第3回講座概要 …………… 松本 照敬 …… 5	

[研究員の著書紹介・翻訳書紹介・基調講演]	
石井寛治 著『帝国主義日本の対外戦略』 …… 6	
鈴木珠里 訳『古鏡の沈黙』 …… 6	
滝口明子基調講演	
「欧米を中心とした茶を楽しむ文化」 …… 6	
東洋研究所刊行物…………… 7	
新刊案内…………… 8	

恩師 影山誠一教授を偲ぶ

東洋研究所教授 福田 俊昭

愈々、定年を迎える。考えてみると、学生時代・教員時代を合わせて半世紀の間大東文化大学にお世話になった。長い年月のようで短い期間であった。その間いろいろな人と出会い、別れを体験してきた。その中で最も印象深いのは影山誠一先生である。その一端を紹介し、当時の先生を振り返ってみようと思う。

大学に入学した年に必修科目である「漢文講読」を履修した。担当教授は影山先生で、講義内容は論語であった。句読点と返り点が施されたテキストで、それを先生が淀みなく訓読、解釈し、それを学生が筆記するのである。そして翌週の講義の冒頭に先週講義された漢文から数行抜粋し、句読点だけの漢文に返り点・送りがなを付けさせるのである。時間は十分程度であるが、前回の講義箇所を全部訓読しなければならなかったので大変であった。しかし、私が今日あるのはこの小テストの御陰であると感謝している。

影山先生は、千葉県の馬来田から二時間半～三時間かけて来校し、一時限目から講義されていた。



影山先生が通われた馬来田駅（当時のまま）

ある時、先生が小テストの採点は電車の中で行っている。と小耳に挟んだことがある。先生は電車を仕事場として活用していたらしい。電車活用で忘れる事ができないのは、先生がプロレスが好きで、いつもバッグの中にスポーツ新聞を入れておられた。これを電車の中で読むのが楽しみであることを耳にしたことがある。そして先生が研究室に入室されると、同室の私の机の上にその新聞を置いてくださったことを思い出す。

1年次の秋も深まった頃、附属高校の坂本校長

と寺尾教頭に呼び出され、高校に行くと、寺尾先生から「アルバイトをやっているのか」と唐突に尋ねられたので、アルバイトをしている旨を申し上げると、寺尾先生から「アルバイトに相当する金額を援助するので、アルバイトを辞めて欲しい。」と言われた。寺尾先生の説明によると、「現在、大東文化大学の前身である大東文化学院時代の仲間、教員関係者が段々と減り、大東文化大学の将来を考えると、生え抜きの教員を育成しなければならないと仲間内で話し合った。」という。そこでその一環として仲間達が金を出し合って奨学金制度を制定し、金銭だけでなく、大学の教員に数年間漢文の指導を依頼して勉強してもらうことにしたので、これに応じて欲しいと言うものであった。

これが中文特待生の始まりである。私の家は貧乏で本来なら大学へ行くことができなかったが、親に懇願して上京したので家からの仕送りがなかった。従ってアルバイトをしなければならない環境にあったので、この話は大変嬉しかった。実はこれにも影山先生が関わっていた。それは奨学金制度を作る際に、その奨学生を選出する役目を影山先生に一任したという。今考えてみると、小テストを奨学生を決める為の試験と言わないで連続的に実施した意図には、奨学生を決める試験というと多くの学生は奨学金欲しさに勉強し、試験

が終わると勉強しなくなることを懸念してのことではないかと思う。先生は普段から地道に努力する人を好んでいたことを考えると符号する。

またこういう一面もあった。2年目からは自分で授業料を支払わなければならなかった。ところが私には金銭がなかったので、影山先生に相談したところ、先生が給料日に印鑑を私の目前に出して「経理課に行って給料を取って来てくれ。」と言われ、給料袋を差し出すと、その中から前期分の授業料の一部を出して下さったこともあった。その返却は当時大学には前年度の成績優良者には授業料相当の奨学金が与えられる特待生制度があった。運よく特待生に指名され、影山先生に借りた授業料を返却することができた。この状態がしばらく続いた。

影山先生にお世話になった話はまだまだあるが、紙面の関係上この辺で筆を置くが、影山先生は人情味のある先生であった。先日、遅ればせながら博士号取得と定年退職を迎える報告をする為に墓前に香華を手向けてきた。

先生のご恩に報いることができたかどうかかわからないが、私も先生のような人になりたいと願っている。

(東洋研究所教授 福田俊昭)



公開講座「アジアの民族と文化」

2012年度(第28回)東洋研究所公開講座は、「アジアの民族と文化」を統一テーマに下記の通り開催された。受講者総数は延べ86名(一般73名、教職員13名)で、各講座の概要は以下のとおりである。なお昨年に引き続き、長年ご出席いただいた方2名に対して記念品を添えて表彰した。

◇第1回 11月8日(木) 13:00～15:00 大東文化会館3階K-0302研修室

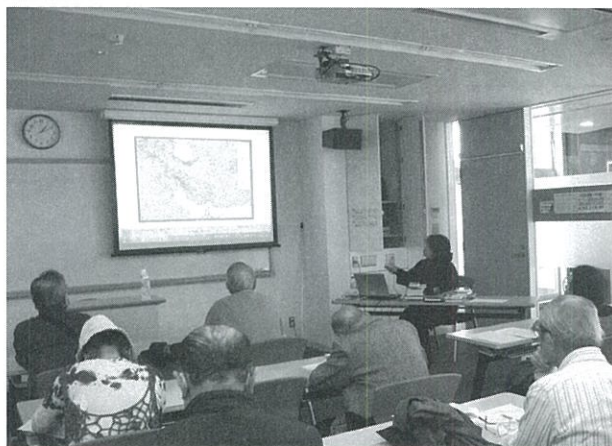
テーマ：言葉を紡ぐ女性たち ～現代イランに生きた女性詩人たち～

講師：鈴木 珠里(東洋研究所兼任研究員, 大東文化大学非常勤講師)

イランは、西にイラク、東にアフガニスタンとパキスタン、北に中央アジア諸国、南にペルシア湾を挟んだアラビア諸国に囲まれ、面積は日本の約4.4倍、人口約7500万人の大国である。政教一致の「イスラーム共和制」という政治体制を採り、原油輸出・核問題・米国による経済制裁など、ニュースではその名を聞かない日はないイランであるが、その素顔が報道される機会は驚くほど少ない。今講演会では、文学、特に「詩の国イラン」というテーマで、報道では見ることのないイランの一面を紹介した。

イランは「ペルシア」と呼ばれた時代から世界でも有数の詩の国として著名な詩人たちを輩出してきた。特にイランが最も誇る抒情詩人ハーフェズ(一三二六?～九〇頃)は、後にドイツの詩人ゲーテの『西東詩集』にも影響を与えたほどで、イスラーム教の聖典コーランと同様にイラン人の家庭には必ずある、と言われている。また日常的に私的な手紙や日記から公的な政見放送や選挙演説、宗教説法にも、イラン人は詩を引用する。彼らにとって詩は古来より最も雄弁に己の感情や思想を語る道具だった。

20世紀初頭、西洋からの新しい概念の流入や近代化による女性の社会進出に伴い、女性詩人たちも文壇に登場するようになった。女性詩人パルヴィーン・エーテサーミー Parvin 'Etesami (1907-38) は、女性、子供、労働者といった当時の社会的弱者をテーマにした詩を発表した。スィーミン・ベフバハーニー Simin Behbahani (1928-) は、エーテサー



ミーに影響され作詩を始めた幼年時代から現在まで約70年間、イランの社会的テーマから女性の内面や情感といった私的テーマまでを詩の中に取り入れ、時には発禁、軟禁といった不遇に遭いながらも今現在も作詩活動を続ける。そしてイラン現代詩史において最も有名な女性詩人フォルグ・ファッロフザード Forugh Farrokhzad' (1935-67)の作品は、死後40年経った今でも多くの人々に愛読され、多くの映画監督や芸術家たちにインスピレーションを与えている。また、市井の女性たちも、自らの言葉や感情を詩として表してきた。彼女たちの作品は通常他の人々に知られることもなく消えて行く運命にあるが、唯一、ジャーレ Zhale (1884-1946)は、偶然にもその作品が死後発見されスウェーデンで出版された「名も無き」詩人だった。彼女の作品は立憲革命期当時の女性たちの問題や苦悩を伺い知ることができる貴重な資料でもある。

講演会は最後にこの女性詩人たちの翻訳作品やその作品が引用されたイランの映画を紹介して終了した。

◇第2回 11月15(木) 13:00～15:00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：日露戦争と在外日本知識人の言論活動

—岡倉覚三(天心)の発言を中心に—

講師：岡村 佳子(東洋研究所兼任研究員, 国際基督教大学準研究員)



1904-05年の日露戦争は、主権国家間の軍事衝突であっただけでなく、東西文明の対立や人種間の戦争といった、文明論や文化イメージの言説を巻き込んだ国際世論上の紛争でもあった。日本は非西洋の被抑圧民族から共感と期待を集めた一方で、新たな帝国主義国家として欧州世論から黄禍論を突きつけられた。明治政府は欧米に向けて反黄禍論プロパガンダを展開し、民間の在外日本人知識人も、日本に対する世界の注目に応じて日本の文化宣伝を繰り広げた。

日露戦争勃発の日である1904年2月10日、岡倉覚三(天心1863-1913)は三人の門下生を伴いアメリカに向けて横浜港を出発した。ボストン美術館での調査と門下生たちの作品展開催という美術上の目的をもつての渡米であったが、岡倉は在外日本人の反黄禍論と文化宣伝の流れに自ら進んで加わった。3月にニューヨーク到着後、岡倉は戦争における日本の立場を弁明する論説を地元の新聞に投稿し、11月には、近代日本の国家的成長の「内的」要因をドラマティックに描いた英文著述『日本の覚醒』を出版した。

日本政府が欧米に派遣した金子堅太郎と末松謙澄は、国際社会における親日的ムード形成のプロパガンダのために文化論を動員した。金子、末松、

そして在米の歴史学者朝河貫一による黄禍論否定の発言では、モンゴルと日本との民族性の差異が強調された。中世のモンゴルの遠征が、黄禍論における黄色人種の獐猛なイメージの形成に作用していたからである。その一方で、日本と結託して西洋列強の世界的支配を脅かすとされた中国については、その「平和的」文明が日本人によって宣伝された。上記の新聞論説と英文著述における岡倉の主張も、これと同じ傾向を有していた。

しかし、非西洋における西洋帝国主義の影響が軍事的・政治的次元にとどまらず文化的次元にまで及んでいることをかねてより問題視していた岡倉は、それを複合的な「白禍」として批判し、ロシアに対する日本の勝利に西洋優位の価値観への反発の意義を見出す発言をした点において、他の日本人論者とは違っていた。この戦争をめぐる世論から「東洋対西洋」の対立図式を排除しようとした日本の公式プロパガンダにとって、岡倉のこの主張は都合が悪かった。

こうした二つの方向性に揺れ動く岡倉は、日本が勝ち進んでいくにつれ、この戦争が結局は帝国主義の土俵の上での戦いに過ぎないことを認識するに至る。日露戦争と重なった岡倉の滞米期間は、祖国の一大事に対応しようとする自分自身のナショナリスティックな衝動と、大局的に見据えていたアジアの文化的問題との間で揺れ動き、両者の間の距離に気づいていく過程であった。

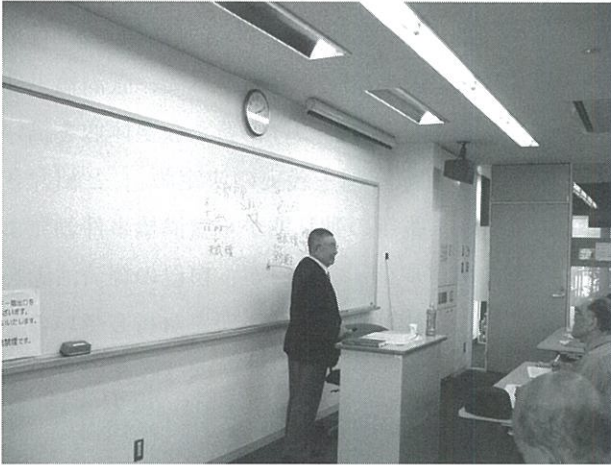


在りし日の岡倉天心

◇第3回 11月22日(木) 13:00～15:00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：日本仏教の年中行事

講師：松本 照敬（東洋研究所教授）



日本人の一年の生活は、初詣に始まり除夜の鐘で終わる。年間さまざまな行事があるが、仏教寺院とむすびついている行事は数多くある。仏教行事は、その発生の由来が忘れ去られ、単に慣習として行われているものも少なくない。

初詣は、かなり古い時代から続いている行事と見なされているが、実は近代に成立した行事である。

明治政府は、天皇を中心とする統一国家の樹立を目指し、国家の宗教として神道を選びとった。そして天皇が元旦に四方の神々に拝礼する四方拝を行っていることになり、国民も伊勢神宮を頂点とする各地の神社に参拝するよう促したのである。初詣が国民の間に浸透したのは、明治の中期であるといわれる。

政府の思惑通りに事が運ばなかったのは、初詣を旧年を無事に過ごせたことに対する神々への感謝の意を表する行事として実行させようとしたのであるが、民衆は、当年の家内安全、商売繁盛、厄難消除など現世利益を求め、神社のみならず仏閣へも足を運んだことである。今日、関東地方では、

成田山新勝寺、川崎大師平間寺、金竜山浅草寺に毎年数百万人の参詣人が訪れている。こうして初詣は、諸願成就を祈る国民的行事として定着しているのである。

彼岸会もまた為政者の意図とは異なって定着した仏教行事の一つである。

桓武天皇は、わが子・安殿親王を後継者とすべく、弟・早良親王の皇太子を廃して淡路に流す。早良親王は非憤慷慨、絶食して島流しの途次で餓死する。その後、桓武天皇の正妃をはじめ夫人たちが次々に死亡、安殿親王も病気となる。天皇は早良親王の崇りとして恐れ、「春分と秋分を中心とした前後7日間『金剛般若経』を崇道天皇（早良親王）のために転読させた」のである。

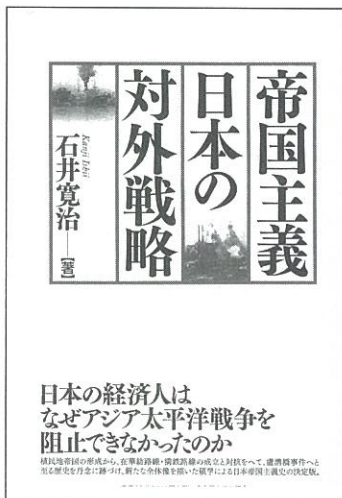
早良親王の霊をなだめるための彼岸会は、やがて民衆によって自分たちの先祖供養の行事として定着されるようになった。

仏教行事のみならず、月見の宴など今日では忘れ去られようとしている行事もあるが、年中行事は、人びとの季節感や情操を豊かにする効用もあるので、後代に末長く伝えて行きたいものである。



〔研究員の著書紹介〕 石井寛治著 『帝国主義日本の対外戦略』

東洋研究所教授 山田 準



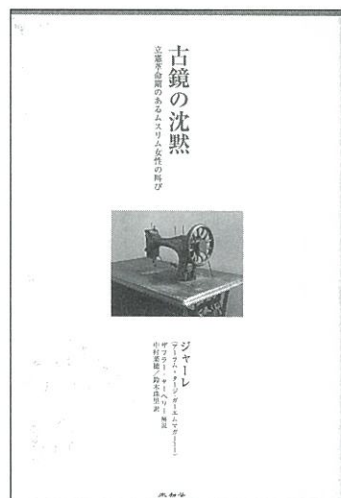
『帝国主義日本の対外戦略』
石井寛治著
名古屋大学出版会
2012年7月刊

著者は、共同研究部会、「昭和社會經濟史の総合的研究」（主任兵頭 徹）の兼任研究員。本書の帯によると、「日本經濟人はなぜアジア太平洋戦争を阻止できなかったのか、植民地帝国の形成から、在華紡路綫・満鉄路綫の成立と対抗をへて、盧溝橋事件へと至る歴史を丹念に跡づけ、新たな全体像を描いた碩学による日本帝国主義史の決定版。」と紹介されている。幕末維新の動乱期から盧溝橋事件勃発まで、近代日本ブルジョアジーが、自己の經濟活動をどう正当化し、位置づけていたかを分析している。

〔研究員の翻訳書紹介〕 鈴木珠里訳 『古鏡の沈黙』

東洋研究所教授 山田 準

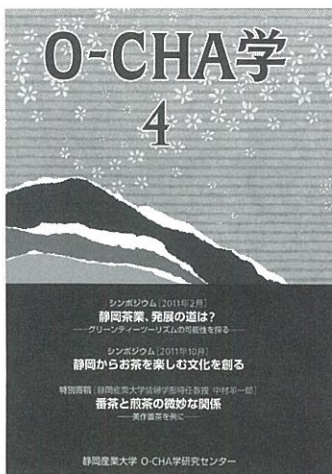
訳者は、共同研究部会、「イラン文化圏における伝統と変容の研究」（主任原 隆一）の兼任研究員。本書には「立憲革命期のあるムスリム女性の叫び」という副題が付いている。ミシンが文明開化であったイラン近代化の黎明期に誰にも見せられず本に挟まれていたジャーレと言う女性の詩は、当時のイラン女性の苦しみと抑圧が歌われていた。これにザフラー・ターベリーが解説を付けた原書を中村菜穂・鈴木珠里が翻訳したもの。イラン女性の文化的伝統の一面を知ることができる。



『古鏡の沈黙 立憲革命期のあるムスリム女性の叫び』
ジャーレ著、ザフラー・ターベリー解説、中村菜穂・鈴木珠里訳、未知谷発行
2012年4月刊

〔研究員の活動〕 滝口明子基調講演 「欧米を中心とした茶を楽しむ文化」

東洋研究所教授 山田 準



『O-CHA 学 4号』
静岡産業大学情報学部 O-CHA 学研究センター編集・発行
2012年3月刊

講演者は、共同研究部会、「西欧植民地主義再考」（主任山田 準）の兼任研究員で、本学国際関係学部国際関係学科准教授。昨年10月、静岡産業大学 O-CHA 学研究センターで開催されたシンポジウム『静岡からお茶を楽しむ文化を創る』の基調講演として「欧米を中心とした茶を楽しむ文化」を発表。その内容が同センターの『O-CHA 学 4号』に掲載されました。

【機関誌】

- 東洋研究 第184号（2012年7月25日発行）
福田 俊昭…『朝野僉載』に見える嘲嗤説話（後編）
堀池 信夫…『中国自然神学論』の「鬼神」－ライブニッツの朱子解釈－
相田 満…国文学（日本文学）研究におけるデジタル地名辞書の活用の可能性
松本 照敬…ラーマーヌジャ思想の研究（9）
- 東洋研究 第185号（2012年11月25日発行）
篠永 宣孝…ロシア革命後の露亜銀行再建の挫折、1917～1926年
滝口 明子…欧米茶書の中の東洋－ボンテクー『茶論』研究－
齋藤 俊輔…ポルトガル領インドとビルマのポルトガル人傭兵
－ディオゴ・ソアレス・デ・メロの事例を中心に－
林 裕…アフガニスタン農村における現状と意思決定構造
柴田 善雅…南洋興発株式会社の関係会社投資
- 東洋研究 第186号（2012年12月25日発行）
濱 久雄…明代における来知徳の易学とその影響
山下 克明…院政期の大将軍信仰と大将軍堂
小坂 眞二…十二世紀代の怪異六壬式占文について（二）
中村 聡…福澤諭吉と排耶蘇教問題
中村 士…蛮書和解御用の創設とその後の天文方
- 東洋研究 第187号（2013年1月25日発行予定）
小林 春樹…『漢書』「五行志」における董仲舒の役割
武田 知己…外務省と知識人 1944－1945（二・完）－「ジャポニカス」工作と「三年会」－
岡崎 邦彦…管見「日中国交正常化40周年」－日中国交正常化とその後日中間の諸問題－
嶋 亜弥子…農村女性リーダーへの職業訓練の展開－北京市实用技能訓練学校の事例－
大杉 由香…戦前日本における災害の実態－全国統計を通して見えてきた生存の問題－
小湊 浩二…戦後の公的職業訓練制度の確立とその諸問題（2）
－炭鉱離職者と職業紹介・職業訓練－

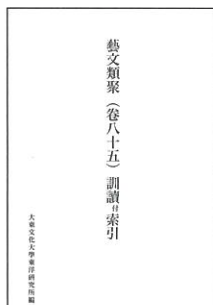
【刊行図書】

- 『晉書校補』本紀1（2013年2月28日発行予定）
B5判 東洋研究所兼担研究員 渡邊 義浩、東洋研究所兼担研究員 高橋 康浩 編
- 藝文類聚（巻86）訓讀付索引（2013年2月28日発行予定）
B5判 東洋研究所教授 福田 俊昭（代表）他6名共著
- 『茶譜』巻5 注釈（2013年3月25日発行予定）
B5判 東洋研究所兼担研究員 藏中 しのぶ 他著

◇東洋研究所事務室人事◇

柄澤 衛 2012年10月1日付 東洋研究所事務室に配置換え
大山 郁子 2012年10月1日付 図書課に配置換え

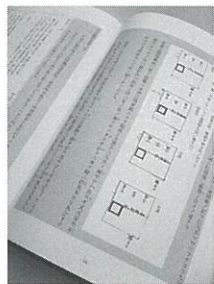
新刊案内



『藝文類聚』(巻85) 訓読付索引
大東文化大学東洋研究所「藝文類聚」研究班 代表 福田 俊昭
2012年3月21日発行／B5判 130頁／頒価¥5,000(税別)

『藝文類聚』は中国の類書の中でも早い成立に属する類書で、日本文学への影響は計り知れないものがある。本書はその『藝文類聚』を巻ごとに訓読文を施し、四部叢刊に採録されている作品については校異を付し、最後に利用者の便を考慮して重要語彙索引を掲載したものである。巻85は、「百穀部」の穀 禾 稻 稭 黍 粟 豆 麻 麥と「布帛部」の素 錦 絹 綾 羅 布 を収録している。

《既刊》巻1～巻16, 巻80～巻84



『茶譜』巻4 注釈
藏中しのぶ・福田 俊昭・相田 満・安保 博史・矢ヶ崎 善太郎共著
2012年3月21日発行／B5判 296頁／頒価¥8,000(税別)

『茶譜』全18巻は、茶道流派の生成がきざし始めていた寛文年間(1661～1673)頃の成立とされ、茶道全般におよぶ総合的な類聚編纂書である。各項目について、千利休流・小堀遠州流・古田織部流・金森宗和流等、流派のちがいを対照的に提示しつつ、茶の湯や茶室にかかわるさまざまな記事を類聚編纂した茶道百科事典ともいべき性格を備えている。

《既刊》巻1～巻3



『昭和社会経済史料集成』第38巻 昭和研究会資料(別巻)一総目次・総索引一
兵頭 徹・大久保 達正・永田 元也 編集
2011年8月31日発行／A5判 551頁／頒価¥9,000(税別)

昭和研究会は、後藤隆之助(1888～1984)主宰のもと昭和8年に発足した民間国策研究機関で、近衛文麿(1891～1945)のブレーン・トラスト集団である。政治、外交、経済、社会、教育、文化等の分野に当時一流の有識者が数多くの政策研究案を立案した。本巻には、第31巻から第37巻に収録した「昭和研究会資料」の総目次に総索引を付し、さらに、昭和同人会を中心とした13件の資料を補遺として採録した。

《既刊》第1～30巻 海軍省資料(1)～(30), 第31～37巻 昭和研究会資料(1)～(7)

☆この他の東洋研究所刊行物についてはホームページをご覧ください。

刊行図書取扱店

■汲古書院

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-5-4
TEL (03) 3265-9764

■池上書店(大東文化大学板橋校舎内)

〒175-8571 東京都板橋区高島平1-9-1
TEL (03) 3932-7567

■進明堂(大東文化大学東松山校舎内)

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560
TEL (0493) 34-4430

大東文化大学東洋研究所所報 No.58

2012年12月25日発行

編集・発行 大東文化大学東洋研究所
〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-19-10
TEL(03)5399-7351 FAX(03)5399-8756
E-mail : tokenji@ic.daito.ac.jp
URL <http://www.daito.ac.jp>
印刷 (株) 東京技術協会